

修士論文（要旨）  
2025 年 1 月

大学の魅力尺度作成の試みと，大学適応感，抑うつとの関連

指導 山口 一 教授

国際学研究科  
国際学術専攻  
心理学実践研究学位プログラム 臨床心理分野  
223J2005  
佐藤 海音

Master's Thesis (Abstract)  
January 2025

An attempt to development a university attractiveness scale and its  
relationship with subjective adjustment for university and depression

Kanon SATO  
223J2005  
Master of Arts Program in Clinical Psychology  
Master's Program in International Studies  
International Graduate School of Advanced Studies  
J. F. Oberlin University  
Thesis Supervisor: Hajime YAMAGUCHI

## 目次

|                |       |
|----------------|-------|
| 第1章：問題と目的      | 1     |
| 第2章 予備調査       | 2     |
| 2.1 調査手続き      | 2     |
| 2.2 調査対象者・調査期間 | 2     |
| 2.3 倫理的配慮      | 2     |
| 2.4 質問項目       | 2     |
| 2.5 分析方法       | 3     |
| 2.6 結果         | 4     |
| 第3章 本調査        | 6     |
| 3.1 目的         | 6     |
| 3.2 調査手続き      | 7     |
| 3.3 調査対象者・調査期間 | 7     |
| 3.4 倫理的配慮      | 7     |
| 3.5 質問項目       | 7     |
| 3.6 分析方法       | 8     |
| 3.7 結果         | 8     |
| 第4章 考察         | 15    |
| 4.1 予備調査       | 15    |
| 4.2 本調査        | 17    |
| 第5章 今後の課題      | 23    |
| 謝辞             |       |
| 参考文献           | I     |
| 付録             | - 1 - |

文部科学省の調査によると、大学での中途退学者や休学状況にある学生は、令和3年には中途退学者2万9千人、休学者が6万4千人と報告された(文部科学省, 2021)。中途退学や休学の理由として最も割合が多かったのが、学生生活不適応・修学意欲低下で19.8%であった(文部科学省, 2021)。それらの対策として高等学校から大学への円滑な移行を図り、大学での学問的・社会的な諸条件を成功させるべく、大学新入生を対象に作られた総合的教育プログラム(文部科学省, 2018)である初年次教育がある。

そこで、中途退学や休学以前の段階に着目し、高校から大学に移行するにあたっての変化、大学独自の持つ要素について考えた。

キャロル(2005)によると、高校から大学に移行する期間である初年次は、他者に依存した学習者から自立した学習者への移行を意味する。すなわち、高校で決まった時間割や学習進度などを把握された環境で学習するのに対し、大学では時間の確保とその中で何を学ぶかを、主体的かつ自らの責任で行う学習だとしている。そして、その移行には大学組織側のサポートも必要不可欠である中で、何を実施するべきか、何が効果的であるかという点は明らかにしていない。

本研究では、大学での適応感に関連する要因、大学ならではの魅力、大学に通い続けるモチベーションや心理的要素、進学する際に重視している点にどのようなものがあるのかについて調べ、尺度を作成し、大学への適応感(以下: 適応感)と抑うつとの関連を調べる。本研究の進展により、初年次教育の取り組みの促進や内容の充実、実施後の効果測定への利用が可能となる。また、学生が大学の魅力として重視している要因が明確になることでその点へのアプローチが可能になり、中途退学者や不登校傾向の学生の減少に役立つと考えられる。

尺度作成にあたってまずは、18歳～25歳の大学生男女150名程度を対象に暫定尺度を用いた予備調査を実施した。尺度を決定するために、記述統計量と相関を確認し、因子分析を行った。因子分析の結果「多様な選択」「人間関係」「興味関心に沿った学び」「相談や機器の活用」の4因子26項目に決定した。

本調査では、18歳～25歳の大学生男女200名程度を対象に、入学前に考えていた魅力度(以下: 入学前魅力度)と実際に入学した後に感じた魅力度(以下: 入学後魅力度)の変化を見た。そしてのうち、どの項目が適応感や抑うつに関連しているかを検討することを目的とした。そして大学入学後良かった点と良くなかった点を自由記述で挙げてもらい、大学の魅力尺度との合致を調べ、尺度の妥当性を確認することも目的とした。

まず、入試形態の違いによる大学魅力度の差はほとんどみられなかった。そして、入学前と入学後の魅力度の差については、「興味関心に沿った学び」因子以外のすべての因子において、入学後に大学の魅力尺度が高まっていることが明らかになった。

また、学年による下位尺度の違いを検討するために分散分析を実施した結果、「多様な選択肢」「興味関心に沿った学び」のみに有意な群間差がみられた。

次に各下位尺度間の相関を見ると、入学前の魅力度と入学後の魅力度はすべての下位尺度に相関がみられ、抑うつについてもその他すべての因子と相関がみられた。「劣等感の無さ」因子のみ、その他の因子に比べて相関がみられなかった。

次に、重回帰分析にて入学後魅力度と大学の魅力尺度前後差を独立変数とし、大学適応感を従属変数とした重回帰分析を行った。結果、前後差と有意な関連があったのは「課題・目的の存在」のみだった。大学入学後に興味関心に沿った学びが得られる機会が増えたことにより「課題・目的の存在」を感じることでできた学生が多かった、あるいは、入学前後差がある学生は自分で課題・目的を見出す傾向にあるとも考えられる。

入学後魅力度と適応感、抑うつとの関連をみるために共分散構造分析を行った結果、入学後大学魅力度が、適応感に正の影響を示し、その適応感が抑うつに負の影響を示していることが分かった。この結果は本研究の仮説を支持する結果となった。

入学後に大学の魅力尺度が上がり、大学に適応できていると感じる学生が増えれば、抑うつ感も下がり、最終的には問題視されている中退者や不登校者は減少することができるのではないかと考える。

学生の主観的・具体的意見を知ること、尺度にて用いた項目を改めて検討することを目的として、入学後に感じた大学の良かった点と良くなかった点について自由記述にて調査を行った結果、大学固有のものを除けば記述のほとんどが設定した魅力度の4因子に分類することができた。この結果から、本尺度で設定した4因子は妥当であったと考えられる。

これらの結果から、入学前から学生が大学に魅力を感じ、それが入学後にも維持されることが重要なのではないかと考える。そのためには、大学説明会の充実や初年次教育の充実が求められるのではないだろうか。1年次の初年次教育では、大学でできる活動、受けられる支援や履修の全容についての説明をすることで「多様な選択肢」「興味関心に沿った学び」「相談や機器の活用」を学生が実感する機会にしたり、また学生同士で関係を築ける場にする工夫を行い「人間関係」の充実を図る機会にしたりと、内容を充実させることの重要性が推察される。大学説明会や初年次教育の内容を検討する際にも、大学の魅力を尺度化することで、学生が実際に感じている大学の魅力を知ることができる点が利点だと考えている。また、本尺度を用いたアンケートを実施することで、各大学の魅力が明確化されることや、不適応を起こしたり、抑うつが高まったりする可能性が高い学生への早期アプローチに繋げることができると考えている。本尺度の活用により、大学在学中に不適応やうつによる不登校や中途退学を選択する学生が減少することを期待する。また、本尺度を用いて学生の感じている魅力を測ることができれば、その調査結果を活かしたオープンキャンパス等の実施によって高校生に大学の魅力が伝わり、大学進学者が増加することも期待。毎年学生が入学してくるなかで、変わり続ける大学教育の魅力をその都度測り、検討することが出来るという点も本尺度の利点だと考えている。今後も本尺度についての研究が進展することによって、汎用性が高まっていくことを願っている。

## 引用文献

- キャロル・マッチ 中島英博訳 (2005). 高校から大学への移行に関する考察-学生・教員・大学組織の三者への提言-名古屋高等教育研究, 5, 167-184.
- 中央教育審議会 (2008). 「学士課程教育の構築に向けて(答申)」 Retrieved July 10, 2024 from [https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2\\_008/12/26/1217067\\_001.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2_008/12/26/1217067_001.pdf).
- 藤田哲也 (2006). 初年次教育の目的と実際 リメディアル教育研究, 1 (1), 1-9.
- 堀井俊章 (2016). 大学生の不登校傾向に影響を及ぼす心理的要因横浜国立大学教育人間科学部紀要, 18, 106-114
- 垣花渉 (2006). 学生コミュニティが果たす初年次教育の役割—コロナ禍で新入生を支援した学生自治会の事例— 名古屋文理大学紀要, 6, 29-36.
- 厚生労働省 (2007). ニート状態にある若年者の実態及び支援策に関する調査研究 別紙 1 Retrieved July 10, 2024 from <https://www.mhlw.go.jp/houdou/2007/06/h0628-1.html>.
- 久木山健一 (2014). 大学での教員—学生関係の研究～講義時間以外での交流のあり方について～ 九州産業大学国際文化学部紀要, 59, 67-74.
- 見館好隆・永井正洋・北澤武・上野淳 (2008). 大学生の学習意欲, 大学生生活の満足度を規定する要因について 日本教育工学会論文誌, 32 (2), 189-196.
- 文部科学省 (2018). “大学における教育内容等の改革状況について” Retrieved July 10, 2024 from [https://www.google.com/url?client=internal-element-cse&cx=080418fab60ca47f3&q=https://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/daigaku/04052801/1417336\\_00007.htm&sa=U&ved=2ahUKEwj8j0jVtqCHAxU7s1YBHamzD3MQFnoECAMQAQ&usg=AOvVaw2tNgcBqLwf-RIGw7y3Ms0i&fexp=72519171, 72519168](https://www.google.com/url?client=internal-element-cse&cx=080418fab60ca47f3&q=https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/1417336_00007.htm&sa=U&ved=2ahUKEwj8j0jVtqCHAxU7s1YBHamzD3MQFnoECAMQAQ&usg=AOvVaw2tNgcBqLwf-RIGw7y3Ms0i&fexp=72519171, 72519168).
- 文部科学省 (2021). “令和元年度の大学における教育内容等の改革状況について” Retrieved July 10, 2024 from [https://www.google.com/url?client=internal-element-cse&cx=080418fab60ca47f3&q=https://www.mext.go.jp/content/20211104-mxt\\_daigakuc03-000018152\\_1.pdf&sa=U&ved=2ahUKEwj8j0jVtqCHAxU7s1YBHamzD3MQFnoECAUQAQ&usg=AOvVaw3rtsTSK3CUxRpCy3Vs5L9J&fexp=72519171, 72519168](https://www.google.com/url?client=internal-element-cse&cx=080418fab60ca47f3&q=https://www.mext.go.jp/content/20211104-mxt_daigakuc03-000018152_1.pdf&sa=U&ved=2ahUKEwj8j0jVtqCHAxU7s1YBHamzD3MQFnoECAUQAQ&usg=AOvVaw3rtsTSK3CUxRpCy3Vs5L9J&fexp=72519171, 72519168).
- 水野雅之・千島雄太 (2018). 大学生活への期待と現実のギャップ経験が大学適応に及ぼす影響 Japanese Journal of Counseling Science, 51, 94-105.
- 大久保智生 (2005). 青年の学校への適応感とその規定要因—青年用適応感尺度の作成と学校別の検討— 教育心理学研究, 53, 307-319.
- 大対香奈子 (2015). 大学生生活充実感を規定する要因の検討 近畿大学総合社会学部紀要, 1, 45-57
- 労働政策支援研究・研修機構 (2014). 大学等中退者の就労と意識に関する研究 調査シリーズ No.138 Retrieved July 10, 2024 from <https://www.jil.go.jp/institute/research/2015/138.html>.
- 坂原泰子・石川健介・(2018). 大学生の不登校傾向と大学適応感との関連(2)—大学適応感が不登校傾向に与える影響の検討—日本教育心理学会第60回総会発表論文集, 60, 540.
- 島田奈美・本間利通 (2022). 大学生活に対する期待と現実のギャップと大学への適応に関する探索的研究 流通科学大学高等教育推進センター紀要, 7, 93-109
- 田中亜裕子・板山昂 (2017). 大学生の自己困難認知と大学適応との関係 教育総合研究叢書, 10, 10-27
- 山田ゆかり (2006). 大学新入生における適応感の検討 名古屋文理大学紀要, 6, 29-36
- 渡邊賢二・堤貴之 (2017). 大学新入生の友人関係の変化と適応感との関連: 短期縦断調査より, 皇學館大学紀要, 55, 122-106.